

Title	ウィーン革命の発端についての若干の考察
Author(s)	廣實, 源太郎
Citation	大阪外国語大学学報. 29 p.323-p.331
Issue Date	1973-02-28
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80483">https://hdl.handle.net/11094/80483</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# ウィーン革命の発端についての 若干の考察

廣 實 源 太 郎

## The Opening of the March-Revolution in Austria

Gentaro Hirozane

According to the studies of the March-Revolution of 1848 in Austria, it break out by the hatred to Kanzler Metternich. But he was excluded from influence in internal affairs and it was controlled by Kolowrat.

The Habsburg Empire changed the situation between 1815 and 1848, and Metternich took on imperial symbol. Man fiel him as the reponsible person of the reactional policy. So blames of Metternich is reasonable one.

### 1 問題のねらい

1848年3月13日、ウィーンにおいて革命の火の手があがり、3月18日にはベルリンに飛び火して、以来、いわゆるドイツ三月革命に拡大していくことになる。それを市民革命と規定する以上、絶対主義的支配体制に対する反体制的運動であったと総括することは可能であろうが、各地でおこってくる革命の具体的な様相なり、要求事項なりをみていくと、その複雑さに、むしろとまどいを感じるのである。しかし、ドイツ三月革命を1つの市民革命と考えるならば、ウィーンでおこった革命の発端が、なにを指向して、どのような終結にもっていこうとしていたかということは、革命全体の性格を考察する上で、かなり重要な意味をもってくるであろう。少なくとも、ウィーンで暴動がおこったという報道が伝えられると、それまでくすぶりつつけていたハプスブルク帝国内の、例えばハンガリーやチェコなどの民族意識を刺激して、それを燃えあがらせ、民族独立革命を派生させたのみでなく、つい最近までは神聖ローマ皇帝の所在する国家として、また、当時のドイツ連邦でイニシアティブをにぎっていた国家としてのオーストリアの伝統的権威が、革命の発生によって否定されたものと受けとられ、ドイツ各邦、各都市の革命派を勇気づけ、全面的な革命へと移行していったのである。

この小論においては、3月13日の午前に焦点をしぼり、その動きをナレーターの立場で述べる

とともに、それが意味するものを考察して、オーストリの革命を構造的にとらえる序説としてみたい。

## 2 ウィーンの3月13日

1848年3月13日のウィーンは曇っていたがおだやかな気温で明けたといわれる。その前日の12日は日曜日で、市民は春の間近い空気をすいながら、いつもと変らぬ、おだやかでのんびりとした休日を楽しんだ。その休日が明けた月曜日、平常と同じように、街角のそこかしこに朝市がたち、それからの1週間を働くべく、朝の早い人たちは、まだ人のまばらな通りを急ぎはじめていた。<sup>(1)</sup>そこまでは平素とまったく変りのない風景である。しかしそのうち、ウィーン市のシンボルといえる聖シュテファン寺院の前に人だかりができていった。そこには衝撃的なビラが貼られ、「ウィーン市民よ。汝らのよき皇帝フェルディナントを彼の反対者の束縛から自由にせよ。オーストリアをよき国家にしようとするすべての者は、誰もが政府を打倒する運動に参加せねばならぬ」<sup>(2)</sup>と書かれていた。確かに、このビラの前に人だかりはできていたが、この種のビラも、当時のウィーンにあっては、かならずしも珍らしいものではなかったから、1日の開始が、他の週あけとそんなに異なったものでなかったことはいえるであろう。

暴動は学生のイニシアティブで始まったといえるし、それは前もって——少なくとも前日の日曜日には——ある程度の計画がもたれていたものと察せられる。7時半ごろ工芸学院に、それぞれの所属大学に向けて行進すべく、かなりの数の学生が集まってきた。アルスター通りにある医学校の学生はその中心になり、一般の家をまわってデモに参加すべくよびかけていたが、反応はほとんど認められなかった。学校当局はこの事態に困惑し、教授たちは普段と同じように授業を開始しようとしたが、学生は騒音でこれに対抗し、事実上、授業は中止せざるをえなくなってしまった。教授のひとり A. Hye は学生の前に現われ、法と秩序の維持を説いたが、「下院議会へ」という学生の声に消されて、有効な説得力はもちえなかったのである。学生数は約 4,000 人にふくれあがり、しかし静かに議事堂に到着し、このころになって作家、法律家、医者、芸術家など知的市民の群がこれに合流しているが、それらの人たちも、学生のリーダーシップを期待していたのである。<sup>(3)</sup>この際、注目すべきことは「学生には下院議事堂への行進以上のプランはなかった」<sup>(4)</sup>ことであろう。すなわち、前日の日曜日もしくはそれ以前からねられていた計画とは、議事堂へのデモ行進であって、革命の計画性ではなかったのである。そうした、デモ行進をおこなうこと自体が目的である計画にすぎなかったのも、その効果やそれ以後の見通しについては、ほとんどといってよいほどたっていない。そんな事情から、もちろん、学生のデモ隊が議事堂に到着した時刻である 8 時半から 9 時にかけては、議員は議事堂におらず、急をきいて、なんんかの議員がかけつけているにすぎず、従って、仮りに学生が議会に対して、何らかの要求を提出しようとしたとしても不可能であった。

漠然とした、しかし期待をもって始めたデモ行進がなんの収穫もなく終わろうとし、そのための挫折感がデモ隊をおおい、沈黙の時流れ、革命への導火線になったこの運動が失敗しそうな

った時、それを救ったのが若い医者 A. Fischhof であった。幸い、そのころになると、かなりの議員が登院してきていた。「今は決定的な時である。議員ともどもわれわれのゴールに向わねばならない。時間は休むことなく過ぎていく。われわれの要求を議会につきつけよう」<sup>9)</sup>といった Fischhof の言葉は、ようやく次の目標を提示したものであった。彼はつづいて、具体的な議会への要望事項をあげた。それは出版の自由、表現の自由、修学の自由、国民統一などである。Fischhof の提案はこの場所にきて、デモ隊の氣勢があがらなくなったのを救済するために、いささか泥縄式になされたものではあったが、それまでのスローガンが「メッテルニヒの退陣」、「政府の打倒」、「皇帝を自由に」などといったものと比べ、はじめて市民の身近な要求を具体化したものと認めてよい。そして、Fischhof の演説でデモ隊は息をふきかえし、つぎつぎに演壇に上がる者がつづき、<sup>10)</sup>最後に、医学校の学生 J. Goldmark が「もはやこの場所にとどまって演説に時を過すことは、われわれにとっても、われわれにつづく市民にとっても、なんの助けにもならないことを知るべきである。われわれ自身で話しあうことは十分すぎた。今や議会に行動させるべきだ」<sup>11)</sup>とのべ、諸要求をまとめて実践に移すようによびかけているのである。

行動の第2段階を見いだしたデモ隊は議会内部におし入ろうとし、衛士と小ぜりあいをして、一部が入り、そこに現われた有力な議員 Montecuccoli 伯と押し問答をくりかえしている。Fischhof は Montecuccoli に訴願状を手渡すためにきたと告げ、内容をきいた Montecuccoli は、その内容の趣旨は議会も承知しており、皇帝も議会の改革を開始しようとしているとのべ、「議会はこの数年、進歩のために戦っており、私はあなた方が法規の道をはずさないように忠告する。あなた方の希望を解決するためには、安らかな時間が必要だ。このやかましきでは一切の解決が不可能だ」<sup>12)</sup>と反論し、若干のやりとりの後、皇帝のもとに訴願状を差出す代表を選ぶことで妥協となり、Fischhof をはじめ、12人の委員がえらばれた。その間、議会の外では、ハンガリーからやってきていたユダヤ人の医学生 M. Goldner が Kossuth がハンガリー議会でなした演説を読みあげていたが、その声も「弾圧者を倒せ」、「メッテルニヒは退陣せよ」の声にかき消されるほどであった。<sup>13)</sup>このあたり、デモ行進から生活体験に基づくスローガンの発見へ、さらにその実践化へと、見えざる糸に導かれるようにして、革命へのコースを歩みはじめた1つのまがり角であったというべきであろう。

事態は次の瞬間、さらに大きくカーブを切った。議事堂の中にいた学生から外にいた群衆に紙きれが投げられ、それには、土地所有者が自分たちと議員で委員会を作り、自分たちのペースで改革案をつくり、新しい法律を作成しようとしているという情報がもまれていたのである。たちまち「議会は裏切った。議会をやっつけろ。議会をとばして宮廷にいこう」<sup>14)</sup>の声があがり、いかり狂った叫びが街中にひびいた。「メッテルニヒをやっつけろ」、「ジェスウィットを追いだせ」、「ただちに市民軍を設けよ」、「憲法」の声があがり、同時に、秩序ある行動をとってきたデモ隊は破壊と略奪の集団に化し、議事堂近くの国立銀行も襲撃され、守衛がこれに対して発砲した。これを機に、皇帝への訴願状を提出するために議事堂に入った12人の代表が射殺されたというデマが流れ、デモ隊は議事堂に流れこみ、椅子や机をたたきこわし、窓やドアを破りはじめた。

当局も真剣にこれの鎮圧を考えねばならなくなり、力と力の対決が迫ってきた。革命に参加した H. Kudlich はその時の心境を次のように述べている。「もしわれわれが成功せず、勝利をえられなかったならば、それは Spielberg（モラビアの政治犯監獄）への行進につながることは確実であった。軍隊が出動したからといって、いいかげんな妥協はできない。それ故、われわれすべての者に選択の余地はなく、エネルギーに突き進む他はなかった」。(11)この決意が一般的であったとしても、デモ隊の中には、この時点で、彼らが好意をよせ、期待している皇帝フェルディナントやフランツ・カールおよびその妻大侯妃ゾフィーが軍隊の出動やその他の破局的場面を回避し、デモ隊の鎮圧よりもメッテルニヒの罷免をえらんでくれるであろうと、秘かに想像していたのも事実である。(12)

デモ隊は労働者や一般市民に参加をよびかけ、その試みが成功して、労働者はつぎつぎに職場をはなれ、鎌、棒、石などをもって集ってきた。(13)これに対して、近衛師団長の Albert 公は午後1時ごろまでに暴徒を鎮圧するように命ぜられているが、特別の必要がない限り、武器の使用は禁止されていた。Albert は武力を用いることなくデモ隊を解散させようとして、群衆の前に説得に現われたが、石や木片が投げられ、不成功に終わっている。同様のことは、宮廷付近の通りを警備していた軍隊にもおこり、議事堂の近くで、石が当たり、指揮官が負傷した。軍隊は突然、反撃し、騎馬隊が銃剣をつけて前進し、発砲したので、革命の最初の犠牲者が出た。4人が射たれ、5人目の婦人は馬にふみつぶされたのである。(14)ここから武力闘争が開始され、多くの血が流されてくるのである。そのころ、人民の代表は、軍隊を市外に引きあげさせること、学生の武装を認めること、メッテルニヒを午後9時まで解職させることなどの要求をもって宮廷に入っていたが、全面化した武力衝突はそのために中止されることはなかったのである。

以上が3月13日午前中のウィーンの動きである。午後に入って、軍隊は暴徒を街の一角に追いこんでいったが、そのことで、燃えはじめた炎が鎮火されるのではなく、革命の様相は、かえって一段と深刻になっていき、同日の夜、メッテルニヒは「これ以上の流血に責任をもてず、これ以上政府に留ることはできない。義務に従って国家に奉仕する感情に従って辞任する」(15)旨の声明を発し、宰相の職をやめ、国外に去るのである。いわゆるメッテルニヒ体制は意外にもろく、予期しないところで、突然、終りをつげ、この知らせがまた、全ドイツの革命派をふるいたせていくのである。

#### 註

- (1) Rath, R. John, The Viennese Revolution of 1848, Texas U. P. 1957, p. 57.
- (2) Reschauer, Heinrich u. Smets, Moritz, Das Jahr 1848. Geschichte der Wiener Revolution, 3 Bde. Waldheim, 1872, Bd. I. S. 173
- (3) Österreich's Befreiungstage, oder der 13. 14. u. 15. März 1848 in Wien, Wien, 1848, S. 8
- (4) Rath, *ibid*, p. 59
- (5) Reschauer u. Smets, *ibid*. Bd. I. S. 183
- (6) これら即席のスピーチは大部分、メッテルニヒへの非難と皇帝およびフランツ・カール大公と彼の妻ゾフィーへの讃美であった。
- (7) Rath, *ibid*. p. 61

- (8) Reschauer u. Smets, *ibid.* Bd. I. S. 190
- (9) Helfert, J. Alexander von, *Geschichte Österreichischen Revolution im Zusammenhange mit der mitteleuropäischen Bewegung der Jahr 1848—1849*, 2 Bde. Freiburg, 1907, Bd I.S. 190
- (10) Rath, *ibid.* p. 63
- (11) Kudlich, Hans, *Rückblicke u. Erinnerungen*, 3 Bde. Wien, 1873 Bd. I. S. 193—94
- (12) Rath, *ibid.* p. 64
- (13) Kudlich, *ibid.* Bd. I. S. 204
- (14) Helfert, *ibid.* Bd. I. S. 246—47
- (15) Srbik, Heinrich von, *Metternich, der Staatsmann u. der Mensch*. 3 Bde. München, 1925, Bd, II. S. 282—83. メッテルニヒはフランツ・カールにも「王国の繁栄が一生を通じての義務と信じてきた自分にとって、もし私が職にとどまることで、それが阻害され、危険になってくるのであれば、辞任するのが当然と信じます」と書き送っている。

### 3 政治の実態とスローガン

以上、くどさをいとわず、3月13日午前のウィーンの動きを追ったのは、この日に革命が開始されるなんの必然性もなかったことをのべたかったからである。デモの計画以後に生まれてきたものは、一種の偶然の積み重なりすぎず、その中から革命への一定の方向性が誕生してきたというべきであろう。もともと学生がかかっていたスローガンは「政府を倒せ」、「メッテルニヒをやめさせろ」、「皇帝を束縛するものをのぞけ」、「フランツ・カール大公夫妻に期待する」といったものばかりである。このことは、革命の直前ばかりでなく、三月前期とよばれる、かなり長い期間をとってみても指摘できるところであって、<sup>(1)</sup>一言でいってしまえば、政権の交替を望んでいるのであって、革命を指向しているものは、例外的に存在するにとどまっている。第一、当時のオーストリアにあっては、Stadelmann も指摘しているように、<sup>(2)</sup>ハプスブルク家の支配に対しては、信仰に近いような信頼感をもっていたのが大勢であったから、世襲君主制を変革させることなどは実現できるものでなかった。学生のスローガンに、皇帝の自由な統治を望んでいるのも、この1つの現われであるといってよい。そのみでなく、当時の一般民衆には、革命という言葉が理解できていなかった。確かに Revolution という言葉は単語としてはあったし、それが18世紀末にフランスでおこったことも承知していたが、革命がおこればなにをするのか、そしてどのようなのかといった点になれば、およそ見当はずれの想像をしていた。<sup>(3)</sup>

以上を前提において、前述のスローガンや13日午前中になされた演説などを整理していくと、学生たちの考えの大略が把握できてくる。それはおよそ、次のようにまとめられるであろう。メッテルニヒの政治が警察政治、スパイ政治であったことは動かせない事実であったから、メッテルニヒの政治家としての評価は別として、<sup>(4)</sup>社会全体に暗さがおおっていたことも確かであった。ことに学生はブルシェンシャフト運動に対するメッテルニヒのカールスバードの弾圧指令を被り、直接の被害者となっていた。知識人にとっても、メッテルニヒの検閲制度や表現の自由禁止

は、メッテルニヒをもって不具戴天の敵とするに十分であり、その代表的なのが詩人グリルプエルトツァーであった。メッテルニヒはこのころ、オーストリアの宰相であったばかりでなく、ウィーン体制の総括者でもあり、ウィーン会議後のヨーロッパ政治の宰相でもあり、フランス革命後の保守政治を指導していた。ここから、学生や知識人にとっては、公式的ともいえる結論が出され、それが行動規準になっていた。整理していえば、19世紀半ばのヨーロッパの保守体制はメッテルニヒの指導によるものであり、その中で、沈滞し、自由をもたないオーストリアの実情は、あげてメッテルニヒの責任にかかるものである。メッテルニヒとは悪の名に相当する。従って、これを打倒すること、すなわち、オーストリア政府の更迭を計ることは善であり、政治的にメッテルニヒに対立しているフランツ大公夫妻は善人に相違なく、メッテルニヒに不信感をもつと伝えられるフェルディナント皇帝は名君に違いないとされていた。2、3年前から、オーストリアは経済、財政的に苦しくなり、物価の上昇、失業者の増大に苦しんでいた。<sup>(65)</sup>これも宰相メッテルニヒの失政にあげられ、その直接被害者である労働者も、暴動に加わっていったのである。

ところが、事実研究の成果はこの認識のあやまりを容易に指摘したのみならず、メッテルニヒを悪政のシンボルに仕立てていったことが、多分に政略的であったことも発見した。メッテルニヒが政治家として仕えたフランツ2世およびフェルディナント1世と不仲であったことは、彼自身ものべているところであるし、しばしばのべられるところであり、この風評は当時も伝わっていた。そこから、あたかもメッテルニヒが独裁者の如く振舞い、皇帝権さえも束縛していたように伝えられ、「皇帝を束縛するものから自由にせよ」のスローガンが出現してくる。しかし、事実、権力の外に追い出されていたのはメッテルニヒであり、ウィーン体制の中核になって、ヨーロッパ政治を牛耳っていた彼も、オーストリアの内部問題に関しては、宰相という地位にありながら、圏外におかれることが多く、内政問題は、皇帝に信頼されていた、ベーメン出身の貴族で、メッテルニヒとはほとんど口もきかなかったといわれる政敵の内相 Kolowrat が握っていたことはその後の研究が証明している。<sup>(66)</sup>

さらにこの事実の上に立って、国家の最高政策を決定するため、皇族、重臣によって構成された枢密院をみても、メッテルニヒにはあまりにも敵が多すぎた。枢密院長の Ludwig 大公のみはメッテルニヒの味方のようにいわれることが多いが、Ludwig のかたくなな、すべてを status quo のままおくりやり方は、status quo を尊重しながらも、漸進的に改良していこうとするメッテルニヒと根本的に異っていた。簡単にいってしまえば、上流階級の間でも、彼は孤立していたといえる。1歩ゆずって、Ludwig とはある程度、気脈が通じていたとしても、事あるごとにメッテルニヒ解任論をもち出す皇族 Jahn, Kolowrat がとりいった皇弟 Franz Karl, その妻 Sophie, ハンガリー太守の Stephan, それに皇帝という一団が正面から敵に廻っていた。<sup>(67)</sup>内相 Kolowrat は民族や宗教を抑圧するような法令を發布し、発布者になる宰相メッテルニヒは、自分の責任でないことを自分の名でなされるのをなげくのみであった。<sup>(68)</sup> Kolowrat は逆に、自由を抑圧しているのはメッテルニヒであって、彼は皇帝権さえも制約していると宣伝することを忘れなかった。<sup>(69)</sup>

学生をデモにかりたて、知識人や労働者をそれに加えさせ、革命に向わせていった基調になる

ものに、メッテルニヒが全然関与していないとはいいいきれまい。けれども、少なくとも、ピラヤスローガン、演説にあらわれたほど、彼が集中的に攻撃される筋合いはない。具体的な政策に関してはKolowrat に責任があるというべきであろうが、Kolowrat を攻撃する文書などは、ついになかった。要するに、宮廷の奥深くでおこなわれていた派閥の形成と権力争いにメッテルニヒが敗れたのである。<sup>(10)</sup> この異種の問題が革命に拡大していったところに、当時のオーストリアの実態がみられるのであり、手段に使われた革命は、オーストリア革命が終った時点で考えれば、亡命したメッテルニヒに代って、別の宮廷勢力が存在していただけとの結果になり、失敗した革命に数えられなければならなかったのである。

#### 註

- (1) このことはハプスブルク領内にあったハンガリーやバーメンなどについてもいえる。それらの原文はHelfert の前掲書に豊富に出てくる。
- (2) 革命を鎮圧した軍隊がウィーンへ入場すると黒・金の旗(ハプスブルク帝国の旗)を振って、熱狂的に歓迎するひとびとをえがいた Stadelmann は「ハプスブルク家の皇帝理念および王国的、軍事的国家観が国民の中に強く生きていたが故に、革命は挫折したのである」という。(Stadelmann, R, Soziale u. Politische Geschichte der Revolution von 1848, München, 1948, S. 172)
- (3) Endres, Robert, Revolution in Österreich, 1848, Wien 1947, S. 7
- (4) メッテルニヒの評価については拙稿「メッテルニヒ研究序説Ⅰ」(評林Ⅴ, 1970) 参照。
- (5) これらの点については Marx, Julius, Die Wirtschaftlichen Ursachen der Revolution von 1848 in Österreich, Gras, 1965 をみよ。
- (6) この点に関し、メッテルニヒを独裁者と断定した Bibl に反論した Srbik は「彼(Bibl)自身、メッテルニヒの変らざる反対者コロウラートの影響力というよく知られた事実を何度も強調し、国家財政は皇帝の手にあり、強力な反対党のいたことを再三のべているのに。Bibl 自身、メッテルニヒは外交の領域に関してのみ自由な手をもっていたが、内政についていえば、1826年以来、コロウラートの手にあり、皇帝の信頼はコロウラートに集っていた、と書いているではないか」といっている。Srbik, ibid. Bd. III. S. 18
- (7) Rath, ibid, p. 51
- (8) メッテルニヒが意外に寛大な政治観をもっていたこと、その実施に反対者の多かったことについては拙稿「オーストリアの再編と民族の問題」(評林Ⅰ, 1970) 参。
- (9) Srbik, ibid Bd. II. S. 261—65
- (10) 宮廷勢力の争いで、彼が孤立する理由の1つには、彼がコプレント出身者で、オーストリア宮廷にとっては外国人であったことが考えられる。

## 4 革命の必然性

それではオーストリアの革命は、まるで見当ちがいの言動やたまたまミス連続からだけ起こったのであろうか。ウィーンでは、革命の最初の段階は単なる暴動であって、市民革命の要素をもたないのであろうか。もしそうだとすれば、オーストリア革命の起点を3月13日よりおくら



せねばなるまい。そこで、48年のドイツ三月革命の起因を、もう一度、基本的に考えてみる必要がある。

ドイツ三月革命は、全ヨーロッパ的に吹きあれた革命の年の一環としておこった。現に、フランスの二月革命がドイツ革命に刺激を与えたことも否定できまい。そればかりでなく、国際政治の均衡の変化についても、無視できないものをもっている。そうした大きな視点から考えた時、三月革命は2つの大きな起点をもっていたといえる。その1つはウィーン体制の崩壊である。断るまでもなく、ウィーン体制はフランス革命を否定することで成立した。フランス革命は自由、民族主義などをヨーロッパに教え、ひとたびこの禁断の木の実を口にした者はそのとりこになっていた。メッテルニヒは、Srbik のいうところによれば、ヨーロッパを救済するために、あえて高度保守的なウィーン体制をしき、自らその指導者となっていたという。<sup>(1)</sup> メッテルニヒがこの体制を採用するにはするだけの理由があったことであろう。けれども、ウィーン体制が成立した1815年という年と48年の間には、30年以上のへだたりがあり、この間に、客観情勢の変化とともに、ウィーン体制そのものの性格も変化してきていた。

ナポレオン没落後の世界を各国利害の最大公約数でまとめ、西欧のイギリス——後にフランスを加え——中欧のオーストリア、プロイセン、東欧のロシアを指導国として、バランスをとりながら出発したウィーン体制であったが、1822年のヴェ罗纳会議をもってイギリスが、つづいてフランスが事実上、脱落していった。<sup>(2)</sup> このことは、19世紀の20年代のはじめに、ウィーン体制の性格がヨーロッパ体制から西欧が抜けて、中・東欧体制にならざるをえなくなったこと、そしてそれとともに、西欧ブルジョア民主主義からするバランスが失われ、君主主義的要素をもつ国家のみの集団になってしまっていたことを意味していた。メッテルニヒはヨーロッパの宰相ではなくして、実際は中・東欧の指導者であったにすぎず、それらを率いて、西欧デモクラシーに対立する立場に立っていた。しかも、中・東欧の中にあっても、スラヴのツァーリズムのロシア、ゲルマン的エンカートゥムのプロイセンに対して、多民族的モナルヒーのオーストリアを対抗させ、イニシアティブを保っていくために、帝国宰相メッテルニヒの果たした役割りは、個々の内政上の指揮権を超えたところで、決定的であり、オーストリアの政治家に限定したところで、Kolowrat などに比べて、メッテルニヒのもっていた比重ははるかに大きく、オーストリア政治をシンボライズしていた人であったのである。

第2に社会構造の変化である。19世紀初頭においては、産業革命はまだイギリスの問題であって、事実においては、ヨーロッパ大陸の問題ではなかった。けれども、19世紀半ばにいたったころには、無論、地域差はあるにしても、産業革命の波は全ヨーロッパを襲い、それに伴って、社会構造が急激に変化してきていたのである。人口の増大、その都市への集中化、工場制の確立、交通・輸送手段の革命的变化、工業化に伴う階級社会の再編成などが進んでいった。

オーストリアにおいても、ベーメンと低オーストリアを中心に、綿紡績を核に、産業革命を受け入れ、1847年には、209 垂の綿織機が動いており、毛織物、製紙業も、徐々にではあるが機械化され、スティーム・エンジンも使用されはじめ、鉄道、汽船が導入されていた。<sup>(3)</sup> オーストリア政府は工業化に力をいれ、鉄道を建設し、関税保護、技術学校の設立などに熱心であった。<sup>(4)</sup>

全体として考えれば、オーストリアの産業革命は立ち遅れ、ゆっくりしたテンポであったが、それよりも、領内地域差が甚だしく、例えば、ベーメンでは急速に産業革命が進められているのに、トランシルヴァニアでは封建的農業段階から1歩も抜け出ておらず、同じベーメンでも賦役農業と機械制工業化が重なりあっている状態にあったのである。その上、産業革命化が進むにつれて、当然起ってくる現象に、なんの対応策も示されていなかった。例えば、ギルド、手工業はこの波の前に、苦境におちいらざるをえなかったが、それに対しての対策はみられず、それが経済事情を悪化させる要因となって働いた。工場は60%の婦人、子供労働者を傭い、<sup>(6)</sup>それが失業者を増加させ、そのことが犯罪を増大させているのである。<sup>(7)</sup>もっと大きな問題は、地域別に、ほぼ特定の民族が居住していたオーストリアで、民族的格差が目だってきたこと、並びに、大工業をドイツ系住民がにぎり、民族別に階級と職業が固定化されはじめたことである。

メッテルニヒが立っていた立場は——Kolowrat が宰相であったとしても同様であったろうか——これらの変化とは別の時点、いい換えれば、貴族主義的で、絶対主義的官僚制の範囲で実務を進め、政策決定は宮中の奥深くでおこなう宮廷政治であった。48年革命が、産業革命から派生してくる新しい民族的エネルギーでもって、旧秩序、それをオーストリアについていえばウィーン体制に当るわけであろうが、その枠組を変革していったところに、基本を見いだすとするならば、メッテルニヒはあらゆる意味で、政治家としての使命が終っていたといわねばならず、それがメッテルニヒの限界となっていた。<sup>(8)</sup>

革命の個々の部分をとりあげた時、あるいは、メッテルニヒの側に立って弁解しようとした時、必ずしもメッテルニヒに責任があるとはいえない。しかし、19世紀初期と中期の差を、民衆がメッテルニヒの名に象徴することで、社会変革を望んでいたとするならば、市民革命に導入されていく必然性が存在したのである。

#### 註

- (1) 「均衡の教えの最後の巨匠であった彼は、……深い意味での保守主義をとり、……体制を維持し、ヨーロッパを守るために、高度保守主義の上に立ったのである。」Srbik, *ibid.* Bd. II. S. 562—65
- (2) 直接には、イギリスはフランスのスペイン出兵を、フランスはオーストリアのイタリア政策を不満としたのであるが、実際には、それぞれの国の市場問題がからみ、ブルジョアジーの利益が反映した政策決定である。
- (3) Blum, Jerome, *Noble Landowners and Agriculture in Austria, 1815—1848*, Johns Hopkins U. P. 1948, p. 68 ff.
- (4) Beidtel, Ignaz, *Geschichte der österreichischen Staatsverwaltung 1740—1848*, 2 Bde. Innsbruck, 1898, Bd. II. S. 358—62
- (5) Blum, J. *Transportation and Industry in Austria, 1815—48*, *The Journal of Modern Hist.* Vol. XV. No. 1. (1943)
- (6) Rath, *ibid.* p. 14
- (7) これらの点については拙稿「オーストリアの再編と民族の問題」を参照。